The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	群動詞とイディオム性
Author(s)	松本, マスミ
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1987, 21, p. 5-20
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47858
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

群動詞とイディオム性

松　本　マ　ス　ミ

1.　はじめに

本論では、群動詞（group verbs）を中心に動詞＋前置詞（V＋P）の結びつきを観察し、Chomsky（1981）で提案されたイディオム規則に基づいて、体系的な説明を試みたい。

V＋P の構造をもつ群動詞（come across, laugh at, look after など）は、前置詞付き動詞（prepositional verbs）とも呼ばれ、ある一つの単位を成すと考えられてきた。だが，Chomsky（1981）を出発点とする GB 理論に於ては、任意の V＋P の議論は盛んである一方、群動詞に関する研究はあまり進んでいるとは言えない。その理由として、イディオムに関するシステムがまだ整っていないということが考えられる。

そこで、本論ではイディオム規則を発展させ、それを手掛りに任意の V＋P と群動詞の双方を区別しながら議論を展開する。第二節では、これまで V＋P の結びつきを説明すると思われてきた再分析を概観し、イディオム性の考慮が必要であることを指摘する。第三節では、イディオム性を配列的側面と意味的側面に分ける立場を取りつつ、イディオム性によって V＋P を分類する。第四節では、各型の V＋P を、イディオム規則によって付与される素性との関係において考察し、イディオム規則のメカニズムの解明を試みる。

2. 再分析による結合

V+P という構造は、群動詞に限らずとも、ある程度の結びつきをもつものと考えられる。これは、次に示されるような前置詞残留(preposition stranding) の現象によって裏付けることができる。

(1) The chair was sat on by Bill.
(2) The bed has been slept in.
(3) Which house does Tom live in ?
(4) Who did you work for ?

(1)〜(4)で用いられている動詞と前置詞は、いずれも任意の組合せである。にもかかわらず、それらはあたかも一つの他動詞であるかのようなふるまいをする。

この結びつきを説明するために、生成文法では再分析(Reanalysis)[1]という操作を用いてきた。つまり、(1)〜(4)では自動詞と前置詞が複合動詞に再分析されているというのである。

再分析は、Hornstein & Weinberg (1981) の提案した斜格痕跡フィルター[2]と組合せることによって、(5)(6)の文が排除される理由を説明することができる。

(5) *Winter was lived during.
(6) *Which meal did they quarrel after ?

(5)(6)は、D 構造では共に時を表す前置詞句であった during winter, after which meal から名詞句および wh 句を移動することによって派生

された文である。どちらの前置詞句もD構造ではS節点に直接支配されているために、再分析がおこなわれない。その結果、双方の痕跡は前置詞句に統率されることになって斜格を与えられるので、斜格痕跡フィルターにより排除されるのである。

一方、(1)〜(4)についてはD構造で前置詞句がVP節点によって直接支配されているので、再分析が適用される。そのためどの痕跡も複合動詞から目的格を付与されることになり、斜格痕跡フィルターによる排除を免れることになる。

以上のように、再分析は任意のV+Pの結びつきの統語構造的な違いを説明することができる。だが、結びつきの強さを考える際には、前置詞残留のような「結合」ばかりでなく、「分離」という側面も考慮しなければならない。

例えば、look after のような群動詞は、受動文では(1)(2)と同じようにふるまう。

(7) Those children must be looked after.

ところが、関係代名詞節における前置詞前置構造では、(1)(2)のV+Pと look after とでは次のような違いが生じる。

(8) The chair on which Bill sat…

(9) *Those children after whom Mary looked…

(8)の sat と on は字句通りの読みしかもたないので問題はないが、(9)では「世話をする」というイディオム的読みが消えてしまう。このような動詞と前置詞の分離の例は、再分析によって説明することができない。と

いうのは、sit on も look afterも 共に受動構文で用いることができる、つまり、再分析が適用される構造をもっているからである。そこで、(8)(9)の違いを別の手段によって説明する必要が出てくる。以下の議論では、イディオム性に着眼して群動詞を再考し、問題の解決を目指したい。

3. イディオム性の二つの側面

本節では、イディオム性の二つの面から群動詞を分類する。

最初に、イディオム性の二つの側面について考えてみよう。前節でみた look after という群動詞は、非常に高い配列的イディオム性と意味的イディオム性の両者をもちあわせている。ここでいう配列的イディオム性とは、look と after が配列的に特殊な結びつきをもっていて、統語的な操作による何らかの方法での分離を許さないという性質のことである。一方、意味的イディオム性とは、look after が look と after のそれぞれの語がもっている意味を組合せてできる意味とは異なった、特殊な「世話をする」という意味をもつ、という性質のことである。

これらの二つの側面は、しばしば混同されているように思われる。しかし、両者は必ずしも並行的であるとは限らない。例えば、意味的イディオム性をもっている語句でも、配列的にはあまり制限されていない場合がある。

(10) The beggar at whom a thoughtless child laughed…

(10)の laugh at は「あざ笑う」という意味的なイディオム性をもつにもかかわらず、look after ほど配列的イディオム性をもっていない。このような二つのイディオム性の間における「ずれ」を見のがしてはならないと思われる。

同時に、(10)と前節の(9)を比べることによって、同じ群動詞といってもその配列的なイディオム性にかなりの差があることがわかるであろう。このような配列的なテストを用いてイディオムに階層性があるということを論じた研究の一つに Fraser (1970) がある。

Fraser (1970) の研究は、生成文法の枠組でイディオムと真正面から取組んだ数少ない研究の一つである。Fraser はどの種の操作を行うことができないかによってイディオムが分類されるとし、次のような凍結性 (Frozenness) の階層を提案した。

(11) A Frozenness Hierarchy

L6 – Unrestricted

L5 – Reconstruction

L4 – Extraction

L3 – Permutation

L2 – Insertion

L1 – Adjunction

Lφ – Completely Frozen

(Fraser 1970, p. 39)[3)]

Fraser の分析には問題点がないわけではない。第一に、彼のイディオムの定義が意味的側面のみについてのものであるにもかかわらず、[4)] イディオムの分類の際に配列的なテストだけに頼っているように思われる。第二に、第一の問題と関連しているが、rely on や scream at のような字句通りの意味しかもたないものも、イディオムの中に含められている。

これらの問題点にもかかわらず、Fraser のテストのうちいくつかは群動詞のイディオム性を調べるのに有効で、L4 と L2 の操作がそれにあた

る。

まず、L4 の操作とは、既に(8)〜(10)でみた前置詞前置である。この構造が許されるのは、任意の V+P といくつかの群動詞である。

(12) The house in which the girl lived…

(13) The girl with whom Bill traveled…

(14) The authority on which they relied…

(15) The problem with which they coped…

(16) The model on which he decided…

(17) The gentleman on whom the servant waited…

(12)(13)は任意の V+P の例であり、(14)〜(17)は群動詞の例である。ただし、(14)(15)と(16)(17)とでは、意味的イディオム性の点で区別しなければならない。

(14)(15)では、rely on と cope with が字句通りの意味しかもたない。つまり、両者は意味的イディオム性をもっていないことになる。そして配列的にも、各々 on と with という前置詞を要求するだけである。

ただし、rely on と cope with には次のような違いがあることが Palmer (1974) によって指摘されている。

(18) I can cope all right.

(19) *You can rely.

(19)の文は rely という動詞を on (または upon) という前置詞なしで用いることができないことを示している。rely on のグループに属するのは amount to, belong to, depend on, resort to などである。一方、cope with のグループに属するのは、differ from, insist on, nag at,

refer to などがあげられる。

次に(16)の decide on と(17)の wait on をみてみよう。両者はそれぞれ「～を選ぶ」と「～に仕える」というイディオム的な読みをもつ。それにもかかわらず、(16)や(17)と同じように動詞と前置詞を自由に切り離すことが可能である。つまり、このグループの群動詞は、意味的イディオム性をもつが、配列的イディオム性が最も低いといえる。これに属するものとして ask for, laugh at, look for, try for などがある。

さて、ここで上のグループよりも配列的イディオム性の高いものについてみてみよう。L4 のテストによって排除されるのは、次に示すような群動詞の場合である。

(20) *The fairy in which he believed…

(21) *The invitation for which she is fishing…

(22) *The missing paper across which he came…

(Palmer, 1974)

(23) *The children for whom they cared…

(20)～(23)の群動詞は前置詞前置によって切り離すとイディオム的な読みが消えてしまう。このことは、これらの群動詞が少くとも配列的には(14)～(17)の群動詞よりも結びつきが強いことを示している。

(20)～(23)の配列的イディオム性をさらに下位区分するテストが L2 の Insertion の操作である。挿入するものとして、副詞を用いてみよう。[5] その結果、次のような容認度の違いが生じる。

(24) He believed strongly in God.

(25) She fished constantly for complements.

(26) *He came suddenly across the paper.

(27) *We must care immediately for the wounded.

(24)(25)のグループに属する群動詞は set on, feel for, harp on, hit on, marvel at, stick to などである。また、同じ care for でも「～を好む」という読みをもつ場合は、(28)のように副詞挿入を許し、このグループに属する。[6)]

(28) You don't care a lot for Helena, do you?

また、(26)(27)のグループに属する群動詞、つまり最もイディオム性の高いものは、look after, aspire to, stand for, ask after, bank on, rail at, dawn on, bear on などである。

以上をまとめると、V+P は次の五種類に分類できる。

Ⅰ. **sit on** 型：　任意の V+P。

Ⅱ. **rely on** 型：　特定の前置詞を要求するが、意味的イディオム性がない。

Ⅲ. **laugh at** 型：　特定の前置詞を要求し、意味的イディオム性をもつ。

Ⅳ. **fish for** 型：　Ⅲよりも配列的イディオム性が高く、前置詞前置を許さない。

Ⅴ. **look after** 型：最もイディオム性が高く、前置詞前置も副詞挿入も許さない。

4. イディオム規則

これまでイディオムについての体系的な研究は，生成文法ではほとんど

みられなかった。それには二つの理由が考えられる。まず、イディオムが個別言語（particular language）の現象であるため、普遍文法（universal grammar）を基軸とする生成文法、特に GB 理論では周辺的な分野となるからである。さらに、個別言語においてもイディオムは特異な現象であるため、規則化および体系化しにくいからである。

しかしながら、生成文法の枠組においてもイディオム表現を切り捨てることは不可能ではないだろうか。というのは、言語においてイディオム表現が大きな比重を占めているからである。同時に、たとえ各現象がバラバラであっても、ある程度普遍的なイディオム規則を設定することが可能かもしれない。

そこで、以下の議論では前節で分類した V+P の結びつきが GB 理論の枠組でどのように説明できるかについて論じてみたい。

最初に各型の語彙部門における表示について考えてみよう。Sit on 型は任意の V+P の組合せであるので、語彙部門の表示は特に問題にならない。例えば、sit は次のような語彙表示をもつと考えられる。[7)]

(29) $\begin{bmatrix} \textbf{sit} \\ +\textbf{V} \\ +[__(\begin{Bmatrix}\textbf{PP}\\ \textbf{Adv}\end{Bmatrix})] \end{bmatrix}$

次に rely on 型であるが、これは特定の前置詞のみをとるので、そのことが語彙部門で示されていなければならない。さらに、(18)(19)でみた rely on と cope with の相違が反映されねばならない。

(30) a. $\begin{bmatrix} \textbf{rely} \\ +\textbf{V} \\ +[__\begin{Bmatrix}\textbf{on}\\ \textbf{upon}\end{Bmatrix}\textbf{NP}] \end{bmatrix}$ b. $\begin{bmatrix} \textbf{cope} \\ +\textbf{V} \\ +[__(\textbf{with NP})] \end{bmatrix}$

Rely on 型もまた、統語部門で再分析を受けることによって複合動詞を

形成するものと考えられる。

さて、次に最も結びつきの強い look after 型について考えてみよう。この型の群動詞が何ものによっても分離できないということから、look after 型は一つの語彙項目として次のように登録されていると考えるのが一つの解決策かもしれない。[8)]

(31) $\left(\begin{array}{l}\textbf{look after}\\ +\textbf{V}\\ +[__\textbf{NP}]\\ +\textbf{'take care of'}\end{array}\right)$

(31)の表示によって、look after 型の配列的イディオム性ばかりでなく意味的イディオム性についても説明がつく。「世話をする」というイディオム的読みが、look after の語彙項目に記載されていると考えればよいのである。

しかし、(31)の表示は必ずしも十分であるとはいえない。たとえ look after 型が(31)だけで説明できたとしても、laugh at 型や fish for 型のように部分的に分離を許す群動詞は同じ方法で説明することができない。三者のイディオム性に階層性が認められるのであるから、これらはむしろ統一された体系または規則で説明される必要があると思われる。

そこで、この問題を解決するためにイディオム規則を導入してみよう。イディオム規則は、Chomsky (1981) では次のような特性をもつとされている。

(32) i. …we may think of an idiom rule for an idiom with a verbal head as a rule adding the string $\alpha V\gamma$ to the phrase marker of each terminal string $\alpha\beta\gamma$, where β is the idiom.

ii. …the idiom rule assigns special features to the verb which, at LF level, will determine the meaning of the idiom.

iii. D-structure, not S-structure or LF, appears to be the natural place for the operation of idiom rules…

(Chomsky 1981, p. 146)

(32ii) で述べられているイディオム規則の素性に注目してみよう。Laugh at 型、fish for 型、look after 型の配列的イディオム性の違いが、イディオム規則の与える素性の違いによると仮定すると、統一的な説明が可能となるかもしれない。

最初に、fish for 型の群動詞について考えてみよう。D 構造で与えられる素性に次のような要求が記載されていると仮定してみよう。

(33) イディオム的解釈が実現するためには V+P は LF で隣接していなければならない。

(33)に従うと、fish for 型のイディオム的解釈が前置詞前置の構造で消えてしまう理由の説明がつく。前置詞前置は D 構造と S構造の間で起こるので、S 構造とそれを入力とする LF で動詞と前置詞は離れてしまう。そのため、(33)の要求を満たすことができないのである。

それでは何故 fish for 型に副詞挿入が許されるのであろうか。この問題は前置詞前置と副詞挿入の行われるレベルが異なると考えると解決がつく。副詞挿入が、かきまぜ規則 (scrambling rules) の一種であるとしてみよう。かきまぜ規則は S 構造と PF 構造の間で働くことから、(25)の S 構造は(34)であると考えられる。

(25) She fished constantly for complements.

(34) She fished for complements constantly.

LF の入力となるのはS構造なので、(25)ではなく(34)が LF 表示となる。(34)では動詞と前置詞が隣接しているので、(33)を満たし、イディオム的解釈が実現されるのである。

次に laugh at 型を考えてみよう。この型に付与される素性には動詞と前置詞が隣接するという要求が含まれていないとすると、前置詞前置の後でもイディオム解釈が消えないことが説明できる。

さらに look after 型は副詞挿入も許さないため、PF でも動詞と前置詞が隣接している必要がある。そのため、look after 型に与えられる素性には(35)のような要求が記載されていると仮定できる。

(35) イディオム的解釈が実現するためには V+P は全てのレベルで隣接していなければならない。

ここで、(33)(35)のイディオム規則が D 構造で素性を付与するメカニズムについて考えてみよう。まず、各語句がどのような素性を受けるかについては、語彙表示に記載されていると仮定する。例えば、fish という動詞は次のような語彙表示をもつと考えられる。

(36) $\left(\begin{array}{l}\textbf{fish}\\ +\textbf{V}\\ +[_\textbf{PP}(\textbf{P}=\textbf{after},\ \textbf{for}^{\textbf{In}})]\\ \quad[_\textbf{NP}]\end{array}\right)$

(36)は fish が for と結びついた時 In という素性をイディオム規則によって受けるということを示している。そしてイディオム規則が D 構造

で In という表示に気づくと、その素性を随意的に付与するものと考えられる。

Look の場合は、fish よりも多くの前置詞と結びついて look after, look at,[9] look for などのイディオムをつくるが、(36)と同じように語彙表示において、各前置詞にどの素性を受けるかというマークがされていると思われる。

以上のように、イディオム規則を導入することによって、look after という一つの語彙項目を設定する必要がなくなる。また、イディオム性の階層性も体系的に説明することが可能となる。[10]

最後に、イディオム規則を利用すると、次のような例も説明することができる。

(37) Sara is beating about the bush.

(38) *The bush was beaten about.

これまで(38)は漠然と beat about the bush の結びつきが強いという理由でしか説明されてこなかった。しかし、beat about the bush に適用されるイディオム規則が(39)のような記載を含む素性を付与すると考えてはどうだろうか。

(39) イディオム的解釈が実現するためには動詞は LF でその全ての補部を保持していなければならない。

(38)では名詞句移動によって、the bush が beat から切り離されてしまう。そのため(39)を満たすことができないので(38)はイディオム的読みをもつことができないのである。

5. 結　　び

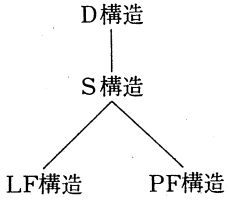
本論では、イディオム規則を発展させ、V+P をイディオム規則が付与する素性の違いによって分類し説明した。任意の V+P である sit on 型から最もイディオム性の高い look after 型までの結びつきの強さの違いは、独立的なものではなく連続的なものであり、その階層性を明らかにするには、V+P を一つの語彙項目として安易に処理してしまうのでなく、より総合的なイディオム規則に訴える方が、説得的な分析ができると思われる。

また、laugh at 型、fish for 型、look after 型の分析の際、大きな役割を果たしたのが、文法の表示レベルの構成である。特に、S 構造の表示が LF と PF の両方に分かれて入力されるという点が、前置詞前置と副詞挿入の違いを説明する鍵となった。さらに、イディオム性を配列と意味の二つの側面に分けるという本論の基本的姿勢は、文法の表示レベルを考えた場合、LF でイディオム解釈が行われるというイディオム規則の性質と相通じるものであるといえよう。

本論では V+P という限られた構造についてのみ論じただけであるので、このイディオム規則が他のイディオム表現にどのように応用できるかをさらに研究する必要がある。また、イディオム性の側面のうち配列的イディオム性に関してはかなりその様子が明らかになりつつある一方、意味的イディオム性はまだまだ研究の余地が残されている。今後の課題としては、意味的イディオム性をさらに探求すると共に、配列的イディオム性との相互関係についても調べる必要があると思われる。さらに、言語習得において、イディオムおよびイディオム規則の習得がどのように位置づけられるかという問題を考慮することによって、この研究はさらに意義深いものとなるであろう。

注

1) 再分析が文法のどのレベルで起こるかについては、議論が分かれている。Hornstein & Weinberg (1981)はD構造とS構造の間だとし、Stowell (1982)はS構造以降だとしている。また、Bresnan (1982) は再分析と類似したV-P Incorporation が語彙部門で起こるとしている。本論は、VP 節点に支配されている要素のみ再分析を受けるという Hornstein & Weinberg (1981) の立場を取っている。なお、GB 理論における文法レベルの表示の構成は次の通りである。



2) 斜格痕跡フィルターとは、斜格を付与された痕跡を排除する仕組である。
3) A Frozenness Hierarchy では、下に行くほど凍結性が強くなる。あるレベルに属すると示されたイディオムは、自動的にそれよりも下のレベルの操作も適用可能となる。また、L6に属する語句はL5～L1までの全ての操作を適用することができ、これらはイディオムでない。
4) Fraser (1970, p. 22) ではイディオムを次のように定義している。

   … I shall regard an idiom as a constituent or series of consituents for which the semantic interpretation is not a compositional function of the formatives of which it is composed.

5) 挿入する副詞は、意味的な要因によって排除されないように、群動詞の外で用いることのできるものにした。
6) 二種類の care for は形容詞化についても違う。Look after 型のみが形容詞化が可能である。

   (i) We were impressed by the well-cared-for gardens.

   (Cowie & Mackin, 1975)

7) ㉙の語彙表示は Jackendoff (1976) に基づいている。( ) は sit が前置詞句 (PP) または副詞 (Adv) を随意的にとることを示している。本論の表示では θ 役割に関連した部分は省略してある。同じ sit on 型でも travel

with の travel は前置詞句を補部としてとらないので、語彙表示には示されない。

8) 遠藤（1986, p. 275）は、これを「語彙仮説」と名づけている。ただし彼は laugh at 型、fish for 型については言及していない。

9) Look at は配列的には㉝のイディオム規則を受けるが意味的イディオム性をもたない。

10) 再分析は laugh at 型、fish for 型、look after 型の場合、イディオム規則が働くと自動的に起こると考えられる。再分析はイディオム規則の一部かもしれないが、紙面の都合上その議論は省略する。

参考文献

Bresnan, J.: "The Passive in Lexical Theory", in J. Bresnan, ed., *The Mental Representation of Grammatical Relations* (M.I.T. Press), 1982, 3–86.

Chomsky, N.: *Lectures on Government and Binding* (Foris Publications),1981.

_____.: *Knowledge of Language: Its Nature, Origin, and Use* (Praeger Publishers), 1985.

Cowie, A.P. and R. Mackin: *Oxford Dictionary of Current Idiomatic English Vol. 1 Verbs with Prepositions and Particles* (Oxford University Press), 1975.

遠藤喜雄：「擬似受動文の特質」『英文学研究　63.2』1986, 271–283.

Fraser, B.: "Idioms within a Transformational Grammar", *Foundations of Language* 6, 1970, 22–42.

Hornstein, N. and A. Weinberg: "Case Theory and Preposition Stranding", *Linguistic Inquiry* 12, 1981, 55–91.

Jackendoff, R.: "Toward an Explanatory Semantic Representation", *Linguistic Inquiry* 7, 1976, 89–150.

Jespersen, O.: *Essentials of English Grammar* (George Allen & Unwin), 1933.

Katz, J.J.: "Compositionality, Idiomaticity, and Lexical Substitution", in S.R. Anderson and P. Kiparsky, eds., *A Festschrift for Morris Halle* (Holt, Rinehart, & Winston), 1973, 337–376.

Palmer, F.R.: *The English Verb* (Longman), 1974.

Stowell, T.: "Conditions on Reanalysis", in A. Marantz and T. Stowell, eds., *Papers in Syntax: M.I.T. Working Papers in Linguistics* 4 (Department of Linguistics and Philosophy, M.I.T.), 1982, 246–269.

（大学院後期課程学生）